

Title	「悲劇のにない手」としてのパステルナーク
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 12 p.165-p.187
Issue Date	1995-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79662
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「悲劇のにない手」としてのパステルナーク

武 藤 洋 二

Пастернак—носитель трагизма

МУТО Ёдзи

Содержание

Вступление

- 1 “Носитель трагизма”
- 2 Хамелеон
- 3 “Совесть нашей эпохи”
- 4 “Резонанс”
- 5 Медведь и дятел

Заключение

Примечания

序

独ソ戦は、鎖国の民、ソヴェトの民衆に外国と接触する機会を与えてしまった。兵士として外国を初めて見た民衆は、爆撃で破壊されたドイツの町にも自分たちより豊かな住しがあることに気づいた。

ソヴェト権力の目のとどかない所に居た者は、それだけですでにソヴェト体制にとって危険である。理由とは無関係に、一たんソヴェト的民衆操作の仕掛けからはずれた者は、異分子的要素に染まったと見なされる。外国のソヴェト人は出先機関の監視下にあるが、ソヴェト国内でたたきこまれた、一にぎりの大金持と極貧の大衆という図式の嘘に気づくことはできる。スターリン体制にとってアメリカやイギリスの豊かさは恐怖である。外国の豊かな住しがやっかいなのである。このやっかいなものに蓋をするため、スターリン体制は、民衆を鎖国的状態におかざるをえないのである。

戦争中、ナチズムという当面の主敵を倒すためにソヴェトは、年来の敵アメリカやイギリスと

手をむすんだ。外国のユダヤ人から赤軍への資金援助をひきだすために、ソヴェトではユダヤ教の活動も自由であり、ユダヤ文化が花開いていることを示す必要があった。そして実際に開花させたのである。

戦争に勝てば、この見せかけは不必要であるばかりか、スターリン体制にとって有害である。独ソ戦中にめばえた同盟国への親近感や連体の感情を一掃し、ソヴェト人に鎖国風の拘束服を再び着せるために、アメリカやイギリスは敵であることを思い出させ、ナチズムの被害者であったユダヤ人は、国境をこえてシオニズムで結びついており、帝国主義の手先であるとソヴェト人は再教育される。

スターリン体制護持のための外国との遮断は、濾過検査収容所⁽¹⁾に象徴される。ドイツ軍の捕虜になっていた兵士が逃走して帰ってきたり、赤軍によって解放されると、祝福される代りにこの人間濾過装置へ入れられる。この収容所でスパイの疑いの度合いが計られる。たいていの者が矯正収容所へ送られた。捕虜になったソヴェトの兵士にとって、濾過検査収容所は、敵国の収容所から母国の収容所へ移るための通路であった。

戦後に外国崇拜反対運動が組織されたのは、理の当然であった。資本主義体制にたいする社会主義体制の優位性に民族の優位性が接木され、ロシア民族を中心とするソヴェト体制の精神病的な自讃が国家運動として行われた。

外国退治と平行し、あるいは、一体化しながら、文学、芸術、学問にたいする弾圧的批判運動がすすめられる。1946年、党政治局員アンドレイ・ジダーノフを責任者として文化にたいする統制が開始された時、ボリス・パステルナークは56才になった。文化全体を党監修の教科書の中へ閉じこめようとする統制下で、彼は、生きているうちに本当の自分の考えを発表する機会はないという危機意識にとらわれる。政治の好転を期待することは無意味である。政治の悪より自分が長生きする保証はない。もはや待つことは不可能であり、待つてはならない。

政治状況と天職と人生の持ち時間との三者の関係が緊張する。

自分の時間の密度を濃くすることが至上命令になる。

詩壇の第一人者といわれるパステルナークは、真の芸術家がそうであるように、自己満足とは無縁で、今までの人生が「心ならずもひかえめな計画表にしたがって過ぎてしまった」と後悔する。50代半ばをすぎた、天職を持つ人間として、彼は、後世に伝える大作に力を集中させる。

スターリン体制への根本的批判を根底にもつ『ドクトル・ジヴァゴ』を、パステルナークは10年かけて完成する。彼が完成稿を手にした1956年は、この新作を祝福し、歓迎するかのようにおもえた。スターリンが神の座から転落し、スターリン時代史をおおいつくしている嘘の鱗が少しずつ剥がれたしたのである。2月14日から開かれていたソヴェト共産党20回大会の最終日に、フルシチョフ第一書記がスターリン批判をおこなった。「人民の敵」が大量に釈放され、囚人による奴隷労働制は不可能になり、スターリン時代の暗黒面について書くことは大きな制限つきで許可された。死んだという表現を銃殺されたという表現に変えることが可能になったのである。

民衆の受難史にたいする絶対的沈黙の強制から部分的解除への移行は、不可避免的にスターリン時代における各人の行為の責任問題を提起する。この状況下で『ドクトル・ジヴァゴ』の作者パステルナークにたいする攻撃が組織される。

1 「悲劇のにない手」

パステルナークは、スターリン時代を加害者とならず、「おせっかいな熊」⁽²⁾の群にまじらず、生きた。密告、批判、弾劾が義務になり、強制され、誰が獣で誰が人間か分らない状況下で、ふつうに、あたりまえに、自然に生きていくのは偉業である。各自が何らかの自衛策をもっている恐怖政治下では、これは無防備な非常識であった。

国家権力が大がかりな政治犯罪をたくらみ、大弾圧を準備するさい、作家や芸術家や学者たちは、それを支持し、「人民の敵」に厳しい処分を要求する訴えに署名させられた。これは、流血をはらむ政治的蛮行が、クレムリンの独断専行でなく、ましてやでっちあげでは決してなく、最高の知性も承認し、同意する正義の裁きであることを、何も知らない民衆に宣伝するためであった。

1936年に就任したばかりの作家同盟書記長ヴラジーミル・スターフスキイは、「モスクワ裁判」の時期にパステルナークにも銃殺要求の署名を求めた。スターリンの政敵であった大物の革命家や軍の最高幹部たちが裏切り者、「人民の敵」、防害者、殺人者として登場する陰謀劇を信じたふりをして、彼らを銃殺にせよという呼びかけに署名することは、パステルナークにはできない。彼は、スターリン時代の慣習と常識に反して、署名を拒否した。これは、国家権力にたいする反抗であり、ただちに逮捕されても不思議ではなかった。著名な文学者たちの署名を集める義務のあったスターフスキイは、本人の意志を無視してパステルナークの名をいれ、公表した。⁽³⁾これを取消させることは不可能であった。

自分自身が危険な状況におかれていた劇作家アフィノゲーノフは、「銃殺の時代」の1937年に、「子供のような単純さ」がパステルナークの武器だといった。⁽⁴⁾

無実の者を死刑にせよという呼びかけに加わるのは、我身の安全をはかるために体制悪を私的に利用することにはかならない。パステルナークの“子供っぽさ”とは、誰でもが加害者になりうる状況のなかで、加害者型の利己主義者にならないことを意味する。

人がかかわりを恐れて受難者から遠ざかっていく時代に、パステルナークは、犠牲者を助けた。流刑人には流刑地へ現金為替を送り、一家の主人が処刑されたり、収容所へ入られている場合には、その留守家族に経済的な援助をした。これには物的証拠がある。パステルナークの死後、郵便局が発行した送金の控えがたくさん見つかった。送金先は、さまざまで、そのなかには、収容所もあった。

パステルナークは、家計のためばかりではなく、援助資金のために、多くの翻訳をした。シェクスピア、ゲーテからグルジアの詩人にいたるさまざまな翻訳は、詩人としてのパステルナーク

にとって無益な仕事ではなかっただろう。しかし、翻訳は、創作の力と時間を奪う敵である。「才能のある翻訳家であるよりも才能のある黒パンでいる方がましだ」⁽⁵⁾とパステルナークはいう。

自分は娑婆にいるのに他の人は収容所や流刑地にいる——このことがパステルナークの心のしこりになっていた。

「この恐ろしい血まみれの時代には誰でも逮捕される可能性がありました。私たちはトランプのカードのようにあつかわれたのです。自分は無事だが他の人はそうではないと俗物のように喜ぶべきではないのです。誰れかが誇り高く悲しみ、喪に服し、悲劇的に生きる必要があります。我国では悲劇は禁じられています、それは悲観主義や泣き事と同一視されています。これはとんでもないまちがいです。」⁽⁶⁾

たとえば、国家権力と一心同体になって身を守ろうとしたヴェーラ・インベルは、全民衆的悲劇の下手人であるソヴェト国家権力が放った合言葉「楽天主義」と「喜び」を自分自身の創作の基本路線にし、現実におきている悲劇には見て見ぬふりをして、ソヴェト体制へ歓喜の歌をささげた。インベルは、特殊でなく、多数派の代表であり、印刷された公認の文字のなかには見せかけの、義務としての楽天主義があふれていた。この状況のなかで、パステルナークは、1939年6月20日のメイエルホリド逮捕に関連して、「悲劇のにない手である生身の人間が必要です」⁽⁷⁾といった。そして、自分自身が悲劇の体現者になった。

魂

我が魂は仲間すべての身を
悲しむ所、
お前は生殺しにあった者たちの
墳墓となった。

彼らの遺体に防腐処置をほどこし
詩をささげ
慟哭の豎琴で
悼みつつ

お前は我利我利の今の世に
良心をかけて責任をもって
立っている、彼らの遺骸を
安んじる骨壺として。

彼らの苦しみの全てに
お前は頭^{こうべ}をたれ
霊安室と墓所のちりあくたが
お前からおう。

我が魂は大いなる墓穴
ここで目にした全てを
お前は水車のように碾いて
粉にした。

さらに碾いて
四十年たらずの間に
我が身に起こった全てを
墓地の腐植土と化せ。

1956年 (8)

これは、スターリン批判の年にスターリン時代をふりかえって作られた「悲劇のにない手」の自画像である。

スターリン時代に「楽天主義」と「喜び」で世わたりしてきた文学者たちは、世の中が一見ひっくりかえったように見える「スターリン批判」の時期でも、その合言葉をすてる必要がない。ソヴェト体制に悲劇を見た『ドクトル・ジヴェゴ』の作者を、彼らは、体制への義務的「楽観主義」の立場から非難し、呪うことになる。彼らは、スターリン体制に加担した汚れた手をおおいそぎで洗うが、決して足を洗わない。

2 カメレオン

人一倍スターリン讃美を行い、行わざるをえなかったヴェーラ・インベルは、偶像の転落後、すぐさま急旋回した。彼女は、カメレオンの変身を躊躇せずにおこなう能力をもっている。彼女の変わり身、変化^{へんげ}は、その生き方の首尾一貫性をあらわす。その時の権力に必要とされる人間になることを生きる基本路線にしている人間は、権力が変われば自分も変身する。変身することによって、権力への忠実さが一貫している。

スターリン崇拝は、もはやインベルに利益と安全をもたらさないどころか、危険である。時流にのるためには、独裁者崇拝をやめるだけでなく、過去の自分の文章からスターリンを削りとらなければならない。かつての神は、今は、インベル個人にとっても疫病神になったのである。す

ばやく自分の著述から退散させる必要がある。まごまご、ぐずぐずしていると、彼女と同じ穴のカメレオンたちが、新時代の旗手をよそおって、彼女を退治するだろう。権力の犠牲者にとびかかった経験のあるインベルには、このあたりのことはお見通しである。

愛や信念や信仰に基づかない単なる手は、捨てるさいに出血をともしない。インベルは、スターリン時代に書いたものが再版、再録されるさいには、スターリン崇拜の跡を虱つぶしに消していく。スターリン体制への忠実さの証しとなり、彼女に実益をもたらした、スターリンの故郷グルジャへの『旅日記』では、スターリンへの乾杯の場面やスターリンの生家を謳った部分だけでなく、スターリン時代のソヴェトへの異常な讃美も消される。

『旅日記』は、グルジャにことよせたスターリン讃歌であるから、讃をとれば、グルジャの風物を愛でた別の作品になってしまう。インベルには、この作品を捨てるだけの良心がない。彼女は、歌の魂を入れかえて、聴かせるのである。彼女の選集は、廃物利用でうまるだろう。

スターリン権力への恐怖がドイツ軍への恐怖にとってかわられたので、彼女の書いたもののなかでは最もスターリン崇拜から遠い『ほとんど3年』もまた徹底的に洗い清められる。スターリンへの媚び、賞讃とは何の関係もない単なる歴史的事実を伝える場合も、スターリンという人名は機械的に消される。たとえば、「スターリンの命令がのっている師団の新聞」は、単に「師団の新聞」となる。すべてこの調子なので、他の例をあげる必要もない。

スターリンだけでなく、一般的にスターリン体制を讃えた文章は、消えるか、文脈を破壊して大はばに削除される。

時代は消え、歴史は偽造され、インベルが浄化される。

「スターリン批判」の年から10年後、1965～1966年にかけて出版されたヴェーラ・インベル4巻選集は、このような作業によってすっかり改装されたものの集まりである。作品の終りにそれぞれ執筆年度が記されているが、それは、歴史とインベルの歩みを反映する数字ではなく、ソヴェト史と自分史を詐称するものである。

フルシチョフ時代におこなわれたスターリン隠しは、インベルの単独作業ではない。それは、検閲官、編集者たちとの、広い意味での共同作業である。もし万一、インベルが、スターリンへの讃め言葉を残して旧作を再版しようとしたら、党の新しい路線に忠実で、時代の変化に敏感な編集者たちによって削られるだろう。今、スターリン時代の汚れを洗いおとす点では、国家権力の利害とインベルの都合は一致している。インベルは誰はばからず、堂々と自分の過去を修正できる。だから、インベルのスターリン隠しは病的なほど徹底している。彼女は、無害なものまで剝がし、削り取る。それは、誰よりもスターリン体制を讃美したせいであり、そして、誰よりも早く新しい状況に適應しようとする気持が強いからである。

インベルは、人生にたいして常に戦闘的である。

人生の闘士インベルは、天職を武器にして、手段にして生きながらえた。彼女は、天職のために自分を犠牲にするような生き方を決してしない。

天職は、一般的に、命に奉仕する。その能力がなければ天職ではない。天職は、能動的にも受動的にも命の炉である。能動的、積極的には、それは、生命力の謳歌の場であり、命の祭の場である。

受動的、消極的には、それは、救済の場となる。天職に没頭することで、人は、内心の、外界の魔物から解放される。創造の炎が余計なものを灰にしてくれる。インベルは、詩作という天職の救済的な力を十二分に利用した。生涯の二つの恐怖——スターリニズムとナチズム——にたいして、天職は、彼女の努力ゆえに救済力を発揮した。

自分がほんとうに書きたいこと、心にそうことだけを書くぜいたくは、彼女には許されなかった。詩神の命ずるままに書き、遠い未来に発表するという生き方は、インベルには無縁であった。

恐怖が、心を占領し、作品の題材も内容もインベルに指示した。創作と政治的処世術とが一体化した。天職にたずさわることは、インベルにとってきれいごとではなかった。

今、全社会的なスターリン崇拜の時代が終わり、インベルの緊張もゆるんで、書くこと自体を楽しむ余裕もでてきた。「スターリン批判」の翌年1957年にインベルは、『靈感と名人芸』という手帖のように薄い小さな本を出版した。この本には御用ずみのスターリンは、もちろん、登場しない。スターリンを気にしないで自分の天職を語れるようになったとき、インベルは67才になっていた。

彼女は、老いについて、老いからくる書く能力の衰えについて、語りはじめる。「年をとるにつれて書けなくなっていくます」という悲観的な出だしは、すぐに、その克服の文にとって代わられる。

「若さにたいしても老年にたいしても、いかなる割引きもしてはならない。」⁽⁹⁾

これは、人生の「予定表からの脱落」を老いた自分に許さない生き方である。彼女は、自分をはげますために、晩年のツルゲーネフがフローベルを元気づけた手紙をもってくる。

「波をかぶるまでは、頭を高く上げておこう。」⁽¹⁰⁾

「スターリン批判」の時代に謹慎するどころか、死という波にのみこまれる時まで意気高く生きていこうと、インベルは、自分の生命力に活をいれる。

「自分をやる気にさせるかけ替えのない能力が去ってしまい、とけて消えてしまい、永久に私をみかざったと思われだし、自分に言訳をしだす（やれ年だ、病気だ、あれやこれや）、そういう苦しいとき（これにみまわれない人が居ようか）、私は偉大な先例をおもいだすのです。書きもの机にむかったまいますの上で永遠のねむりについたマルクスを、最後の日まで働いたゴリキイを、死ぬ少し前にトルストイあての手紙を書いていたペンを手から落としたツルゲーネフを。」⁽¹¹⁾

こんな巨人たちと自分をくらべているのではない、しかし、「彼らの仕事ぶりを身につけることは私たちにも可能です」とインベルはいう。

時代が不必要にしたスターリン崇拜の代りに仕事崇拜が『靈感と名人芸』をつらぬく。

「『心の中で強まっていくのは、全てが仕事にかかっている、という唯一つの確信である。私

の全ては仕事のおかげである、それは生活の偉大な調整装置である。』ジュール・ルナールはこう書いている。

正しい、1000倍もルナールは正しい。

前進、そして前進！つらいことがあるからといって甘えるな！靈感を待つな、自分の手でそれを獲得せよ。」⁽¹²⁾

これは、スターリン主義的国家権力への恐怖から解放された67才の老婆の闘争宣言である。彼女の芸談には老人の枯淡の境地などみじんもない。

この闘志は、執筆だけにむけられるのではない。上からの合図があれば、インベルは、権力が指定した批判の標的にむけて大きな石を投げるだろう。

『ドクトル・ジヴァゴ』が政治事件化していた。

3 「時代の良心」

ついこのあいだまでソヴェト文学界の指導者であったファジェーエフが自殺した1956年5月、パステルナークは、『ドクトル・ジヴァゴ』の原稿を、ソヴェト作家同盟の紹介でやってきたイタリアのラジオの特派員でイタリア共産党員であるダンジェロに見せた。作品は、作者に無断でミラノの出版業者フェルトリネリの手になつた。半生の想いをこめた「自由な表現」の結実は、ここから資本主義国で利潤追求の餌食になる道がひらかれた。これがソヴェトではパステルナークの政治的裏切り行為に化ける。盗まれた作品は、商品として国から国へ転売されていく。ソヴェトで作者が迫害され、世界的な話題になっている間に発売しようとして、大いそぎで翻訳がなされる。⁽¹³⁾

パステルナークは、ソヴェトの代表的な文芸雑誌『新世界』と『旗』に作品の掲載をたのんだ。『新世界』の編集者5人は、長文の手紙をパステルナークに送り、ソヴェト建国の基礎である社会主義革命を否定する作品の掲載を断った。十月革命とそれに付随した一連の変動は、「民衆に苦しみ以外のなにものももたらさず、一方、ロシアの知識人は、肉体的に、あるいは、精神的に絶滅させられた」⁽¹⁴⁾と主張する作品は、パステルナークの古くからの読者には「つらい不意打ち」であると、作家フェージン、シーモノフを始めとする編集者たちはなげいた。

『ドクトル・ジヴァゴ』には、十月革命について私は相談を受けていない、という根源的な問いがある。それは、強制として、一方的な善としてたちあらわれたのであり、同意は求められなかった。十月革命の哲学に無縁で、その権力は自分に敵対していると考えている知識人の懐疑、疑問、考察は、1956年でも「自由な表現」の権利をもたない。「スターリン批判」は、ソヴェト体制の根本には一指もふれることを許さない。

編集者たちは、細部にも不満である。飢え、寒さ、住居の過密化など「革命がもたらした私生活上の不便さ」によって、登場人物たちの行動が決まっていくことに彼らは失望した。高度の精神性を自負する登場人物たちが、歴史的な変動にさいして、じゃがいもや薪について心配しすぎ

る、話題にしすぎると編集部は皮肉まじりになげく。

何を食べているのか分らない革命人形が活躍し、意気だけで生きている者たちが「肯定的主人公」などと呼ばれ、ソヴェト権力に責任のある窮乏生活にふれることが許されないソヴェト文学では、革命のせいで飢え、凍えている人間を描くことには大きな意味があった。

パステルナークは、あたりまえのことを書いたのである。これは、彼自信の生き方と密接につながっている。

編集者たちは、パステルナークと多くのものを共有している主人公ジヴァゴを「ロシヤの知識人の精神の頂点」ではなく、「その沼」であるとみなし、作者を間接的に非難した。そこには、よどんだ沼に写った十月革命がつまらないのは当然だという論理が働いている。

パステルナークは、これとは全く別のところから対極的な内容の手紙を受けとっている。

ヴァルラム・シャラーモフは、収容所から釈放され流刑人的な身分で、医師の補佐員として囚人病院で働いていた1952年、パステルナークへ自作の詩を送った。このときから2人の文通が始まった。モスクワに住むことを許されない半自由人であったシャラーモフは、1954年、17年ぶりにモスクワで妻と会うことだけが許された。この機会を利用して、彼は、パステルナークを訪問し、未完の『ドクトル・ジヴァゴ』の原稿を手にした。原稿を読んだシャラーモフは、「心をかき乱している何か紙へと出口を求めたので、それが書かれたのだ」⁽¹⁵⁾と感じた。

彼は、秘められた心情の吐露に感動したのであり、すばらしい芸術作品に満足したのではなかった。これは、作者の意図、目的と相呼応した反応である。芸術性を犠牲にしても言いたいことを言いつくすのだと、パステルナークは、執筆中に繰り返して強調した。ここにロシヤの精神史における『ドクトル・ジヴァゴ』の意義があり、同時に、これが古くからの彼の愛読者を失望させた。

パステルナークの崇拜者アレクサンドル・グラトコフは、作者の死後この作品を読んで失望した。劇作家グラトコフは、パステルナークが小説^{ロマン}という形式でなく、「自分について、自分の時代について、自分の人生について幅広く、自由に書いた方がよかった」⁽¹⁶⁾と思った。彼によれば、小説、芸術作品を期待した者が『ドクトル・ジヴァゴ』を読んでがっかりするのは、登場人物が作者の考えを分担してのべているからである。ドストエフスキイの影響がみられるが、ドストエフスキイの場合は論争者たちが対等に論じあうのであり、これに反して、『ドクトル・ジヴァゴ』では登場人物が皆「小さなパステルナーク」なのだとグラトコフは指摘する。これは正当だと思われる。作者は、この欠点を最初から覚悟していたのである。

『ドクトル・ジヴァゴ』が書かれた10年間のうちほぼ8年がスターリン晩年の暴政期にあたる。愛人イヴィンスカヤが身代りに逮捕され、パステルナークも崖縁に立たされていた。言いつくすためには急がなければならなかった。パステルナークは、沢山の分身に分かれ、作品は分身たちからほとばしる発言によって構成された。

シャラーモフは、古典的小説は現代人にとって御用ずみだとみなす。『ドクトル・ジヴァゴ』

は、彼によれば、その古くさい、時代おくれの小説の破綻であり失敗作である。『ドクトル・ジ
ヴァゴ』は、^{ロマン・モノローグ}独白小説であり、そこではトルストイの道徳哲学が勝利し、トルストイの芸術的方
法が敗北しているとシェラーモフは考える。(17)

しかし、『ドクトル・ジヴァゴ』と題された詩人の「独白」の内容は、歴史的意味をもつ。シェ
ラーモフは、その発言を偉業だと讃える。

私のひ弱な言葉などまさかあなたに必要なとは思いません、あなたは、我々の腐敗し
た時代にとって浮世ばなれした未攀の高さで我が道を行くだけの精神的堅固さ、明晰さ、能
力を十分にそなえており、いかなる誘惑にも、おきまりの餌にもあなたがひっかからないこ
とを私は承知しております。

あなたこそが我々の時代の良心であり、レフ・トルストイがその時代に占めていた地位に
あなたがいるのだと私はいつも思っていたのですが、これについては一度もお手紙に書きま
せませんでした。

文壇の下劣さ、憶病さにもかかわらず、ロシヤの作家という誇り高い偉大な肩書を成り立
たせている全てのものを忘れさったにもかかわらず、若者たち——彼らにとっては自殺者た
ちの銃声すら、(18)窓のない壁にすき間をあけることにならないのですが——そんな若者
たちをまどわせながら運命のひどい恐ろしい気まぐれのおかげでロシヤの作家とあいかわら
ず呼んでもらっている連中の卑小化、精神的貧困にもかかわらず、生活は、真実をこいねが
いつつ、誠の真実を渴望しつつ、深層において、地下水脈において健在であり、これからも
そうであり続けるでしょう。生活には、何はともあれ、本当の芸術、本物の作家を要求する
権利があります。

あなたには良くお分かりのように、ただ単に、人間であり作家である者の誠実さや道徳的
なまともさをここで問題にしているわけではありません。もっと大きなこと、それなしには芸
術が生きていけないものがここで問題になっているのです。そしてさらに重要なこと、つま
り、ロシヤの名誉の問題と、つきつめればロシヤの作家とは一体なに者なのだという問題と
の解決なのです。ちがっているでしょうか。あなたの責任はこの次元にあるのではないしょ
うか。あなたは、きっぱりと、毅然としてこの責任を自分で引き受けました。これ以外の全
ては、空しいこと、つまらないことです。あなたは時代の誉れです。あなたは時代の誇りで
す。あなたが生きていたということで我々の時代は未来にたいして顔むけができるでしょう。

私はあなたを祝福します。あなたの道が真っすぐであることを私は誇りにおもいます。あ
なたが自分の人生の大いなる事業から、みじんも後退しようとしなかったのを私は誇りにお
もいます。ここ一年は、ただほんのちよっと良心を曲げるだけで、物欲の神に仕えることが
できるおきまりの可能性がありました。しかし、あなたは、そんなことをしようとはなさら
なかった。

神があなたを祝福しますように。この偉大な闘いであなたが勝利することに何の疑いもありません。（19）

これは、コルィマーの地獄について書くことを「人生の大いなる事業」にしている元囚人から『ドクトル・ジヴァゴ』の作者へ、1956年8月12日に郵送された賛歌である。

4 “反響”

全てを自己の管轄下におき、それからはずれた者や物を危険視するソヴェト権力は、国内より先に国外で出版された本の公刊を認めない。パステルナークは、イタリアの出版業者フェルトリネリへ原稿の返却と出版の差止めを求めて電報を打った。イタリア共産党書記長トリアッチが党員フェルトリネリを説得したが、金蔓をつかんだ商売人は、出版をあきらめるより脱党する方を選ぶ。ソヴェト文学の管理責任者である作家同盟第一書記アレクセイ・スルコフは、1957年10月イタリアへ行き出版を中止させようとしたが、失敗した。11月15日、『ドクトル・ジヴァゴ』のイタリア語版が出た。

1958年10月23日、叙情詩と散文の功績によってパステルナークにノーベル文学賞が与えられた。彼は1946年から1957年まで7回もノーベル賞候補にあがっていた。作品の政治事件化と受賞とを直結させることはできない。

公的なパステルナーク狩りが始まった。狩人たちは素早く行動した。受賞から4日目、10月27日パステルナークはソヴェト作家同盟から除名された。組織された作家たちは、「国内亡命者」パステルナークから「ソヴェトの作家という肩書」を剥奪した。罪状は、国家にたいする裏切りである。

作家同盟からの除名は、中世のカトリック国における教会からの破門に似ている。呪われ、敵視され、巨大な国家の中で身の置き場がなくなり、文筆による収入を完全に断たれる。パステルナークは、無収入になる。外国から大金をもらっているという嘘が流され、それを真にうけた者からお金をめぐんでほしいという手紙がきた。

ノーベル賞を辞退せよという公私の圧力も加えられる。受賞の次の日、10月24日、詩人イリヤ・セリヴィンスキイは、「たとえあなたが正しくないと思っても、『党の意見を見無視する』のは、今の時点での国際情勢の下では、自分が住んでいる国へ一撃を加えるのに等しいのです」（20）と手紙に書いた。彼は、大先輩であるパステルナークに、自分の「政治的直感」を信用するようにと助言した。

しかし、セリヴィンスキイにパステルナークを救うつもりはなかった。「今の時点」が「売国奴」パステルナークを非難して、自分を愛国者として売りこむ好機だと彼は政治的に直感したのである。彼は、パステルナークの「卑劣な裏切り」を公的に非難し、迫害に加わった大勢のなかの一人である。彼らは、お上から忠誠心を認めてもらうために、そしてまた、パステルナークの

才能と名声への妬みから、パステルナーク狩りの勢子となり狩人となったのである。

「スターリン批判」によって一定の民主化がおこなわれ、もはや理由なしの銃殺の恐れもなくなり、社会は明るくなった。しかし、権力・官僚機構のなかには、あいかわらず古い血が流れている。

一党独裁で政権が交代せず、不変の一点から命令・指令が下ろされる体制下では、出世主義者たちが、多元的社会よりも、はびこる。

一つの路線で事がはこぶから、才能ではなく、この路線に乗ることが出世の糸口になり、保障になる。才能がなくても、これへの忠実さによって生計をたてることができる。文化の分野でも、専門家としては無能だが官僚としては腕利きという類の者が、それぞれの組織の頂点をめざす。国家権力には、彼らは不可欠である。作家同盟の指令塔にはこの同類が陣どっている。

ソヴェト文学は、作家同盟という狭窄衣を着せられている。この衣に巣くっている官僚化した文学者たちが、禁止された作品にたいする世論づくりの下仕事をおこなう。公刊が禁止されているから、民衆にとってその作品は存在しない。民衆には本ではなく、代作された世論が与えられる。幻の本についての反響づくりは、パステルナークを妬む文学者にたいして、自分が太刀打ちできない文学の分野から政治の分野へ場所を移して勝負する機会を与える。

パステルナークにたいする「全ソヴェト人民」の“怒り”や“憤慨”について報道され、彼を弾劾する投書が新聞にあらわれる。

20年前、1935年6月にパリで文化擁護国際会議がひらかれたとき、パステルナークは、マリナ・ツヴェターエヴァと会った。この亡命詩人は、ソヴェトに帰りたいと言った。そんな馬鹿げたことをすると彼はひきとめた。詩人には「反響」が必要だから、とツヴェターエヴァはその理由を説明した。彼女の無邪気さにおどろいて、パステルナークは、「めっそうもない、ソヴェトにどんな反響があるというのですか」と言った。⁽²¹⁾

今、パステルナークは、権力操作による偽の反響、偽の民の声にとりかこまれている。宣伝を真に受けて、パステルナークは裏切り者、売国奴だと心から信じている者の声もまた偽物なのである。なぜなら、だまされたために発せられた声だからである。これは、宗教改革と異端審問の頃の一挿話をおもいださせる。異端の学者を炙っている火の中へ、一人の婆さんが自前の薪を放りこんだ。彼女は、火刑台上の学者について本当のことは何も知らないが、教会の呪いに加勢することによって、善行をほどこした気持ちになったのである。

5 熊と啄木鳥^{きつつき}

1958年10月31日、パステルナーク処分について討議するため、映画会館^{ドム・キノ}でモスクワの作家たちの集会在ひらかれた。これは、すでに上部で決定されている処分について、一般の作家同盟員に議論させるための政治教育の場である。作家セルゲイ・スミルノフが議長である。ヴェーラ・インベルも出席している。

集会を組織した文学界の権力者たち以外に『ドクトル・ジヴァゴ』を読んだ者はほとんどいない。読んでいない作品とその作者を批判し非難する義務をおわされて、作家や詩人たちが集まった。読んでいない聴衆を前にしてスミルノフ議長は、『ドクトル・ジヴァゴ』の内容を、作者への政治的断罪をおこないつつ、説明した。

「非政治的で、政治に関しては子供であるパステルナークが、全篇政治的モチーフに貫かれた極めて政治的な作品を創った」⁽²²⁾ ことに、スミルノフは注意をうながす。彼がいう作品の政治性とは、ソヴェト体制にたいする批判的考察である。これは、彼の論理では、ソヴェトへの裏切り行為となる。『ドクトル・ジヴァゴ』のあらゆる登場人物が「裏切りの哲学」を説いており、彼の「深い確信によれば」この作品は、「裏切りの擁護」である。作者パステルナークの行動は「裏切りの連なり」であり、これにたいしてノーベル賞が与えられた、ということになる。

パステルナークは、ノーベル賞を断らなかったで、「自国民と文学との敵であることを最終的に自分で暴露した」のであり、彼の「政治的道德的転落は行きつくところまで行きついた」と結論し、議長は、パステルナークの市民権剥奪を政府に要請することを提案した。

「祖国の裏切り者」をやっつけるために愛国者たちが次々に発言する。

レフ・オシャーニン (詩人)

「我々を背後から刺したような人間、そのような作家同盟員、そのようなソヴェトの市民は、我々には要らない。」

コルネーリイ・ゼリンスキイ (文芸評論家)

「行って、あそこで銀貨30枚もらってこい。」

ヴィクトル・ペルツォーフ (文芸学者)

「来るべき国勢調査にパステルナークがふくまれないようにするため彼に国外退去を頼む必要がある。」

アレクサンドル・ベズィメンスキイ (詩人)

「悪い草は畑からぬぎとれ。」

アナトーリイ・ソフロノフ (作家)

「ソヴェト人、ソヴェトの作家でありたくないのだから、我が国から追い出せ。」

セルゲイ・アントーノフ (作家)

「パステルナークが受け取った4万ないし5万ドルは、賞金ではなく、地上における平和と安らぎに対する、社会主義に対する、共産主義に対する犯罪に加担したことへのお礼である。」

ガリーナ・ニコラーエヴァ (作家)

「ソヴェトの地でこの男に居場所を与えるなという意見に賛同する。」

セルゲイ・バルーズジン (作家)

「ロシヤにいい諺がある、『犬の根性は直せない』。パステルナークが我が国からできるだけ早く出て行くのが最善だと思われる。」

ボリス・ボレヴォイ（作家）

「我々は、ソヴェトの世論を代表して彼に言わなければならない、『パステルナーク氏よ、我が国から出ていけ。我々は、あなたと同じ空気を吸いたくない』。」

発言予定者が多く、あまりにも長時間になるので、討論は打ち切られた。インベルは、発言を申し込んでいたが正式に登壇する機会を失った。

決議文についての討議に入った。議長があらかじめ用意している決議文の語句をさらに激しい厳しい表現に代えようとして、聴衆が自席から次々と発言する。

場内の声

「決議案にあるコスモポリト⁽²³⁾という言葉は『裏切り者』という言葉におき代える必要があると思います。」

レシュチェフスキ（決議文作成委員）

「決議文の原案には『裏切り者』という言葉も『裏切り行為』という言葉もともにあります。

しかし、自分の祖国を裏切り、国際的反動勢力に奉仕する者は、非愛国者であり、コスモポリトです。」

場内の声

「決議案には、パステルナークは我が国の現実と人民からとっくの昔に離れていた、という所があります。これは正しくない、彼は人民と現実とに結びついたことは一度もないからです。」

スミルノーフ議長

「パステルナークは我が国の現実と一度も結びついたことはない、と発言者は言っています。

レシュチェフスキさんに、決議案ではどうなっているか読んでみましょう。」

レシュチェフスキ

「『……生活と人民からとっくの昔に離れている、自惚れた唯美主義者で頹廃芸術家……』」

スミルノーフ議長

「常に離れていた、とする方が良いかもしれませんが……何か提案はありますか。この点に何か変更を加える必要がありますか。読みあげられた案文を支持する提案があります。反対はありませんか。採択されました。そのほかに指摘、訂正がありますか。」

ヴェーラ・インベル

「唯美主義者で頹廃芸術家——これは純粹に文学的な定義です。これには未来の裏切り者の意がもられていません。表現が弱い。」

スミルノーフ議長

「これで非常にはっきりと表現されていると思います。」

議長が決議案は満場一致で採択されたと言って、閉会を宣言したとき、一人の老婦人が、私は反対した、全員一致じゃないと叫んだ。速記録は、もちろん、この発言をのせていない。彼女は、スターリンの義姉アンナ・アリルーエヴァである。⁽²⁴⁾

「満場一致」の中身は複雑であった。

集会でパステルナークを弾劾し、誹謗した多くの者の心中には、スターリン時代にうえつけられた権力への恐怖が残っている。「スターリン批判」でほっとしたやさきに行われたパステルナーク迫害は、時代が逆もどりしたような恐怖を彼らにいだかせた。パステルナークを罵った詩人レオニード・マルトゥイーノフも、恐怖の犠牲者であるがゆえにパステルナークの加害者になった。彼は囚人であった。再び流刑地へ送られるようなめにあいたくない。彼は自から告白している。

「私が望んだのは、以前のことがぶり返さないようにというただそれだけです。自分に何かされるのではないかという、永遠にびくびくした状態からやっと我に返り始めたばかりだったのです。」⁽²⁵⁾

マルトゥイーノフは、釈放され、もどってきて、作家同盟から一部屋わりあてられた。アパートの独立した一区画を与えられたのではなく、その一部だけである。同居人がいる。しかし一部屋だけは彼の専用である。共同住宅のなかのこの一部屋は、彼にとって初めての自分だけの住み家だった。空っぽの部屋の前で彼は両手で顔をおおって叫んだ、「こんなにも遅く。こんなにも遅く。」

人生の半ばを過ぎてから手にした自分だけの一隅は、自分の私有財産ではなく、住む権利をもらっただけなので、お上にうとまれれば、とりあげられるかもしれない。国家権力が総力をあげて一人の詩人を、一つの作品を攻撃するさまは、スターリン時代の悪夢をよみがえらせる。マルトゥイーノフには、自分が国家権力の忠実な僕であることを売りこむ必要があった。自分が再び流刑人にならないように、自分の部屋が奪われないように、マルトゥイーノフは、演壇に上った。

「パステルナークがいわゆる象牙の塔から脱け出るように、私たち皆が手助けしたかった、しかし、彼の方はこの塔から出て本物の現実の新鮮な空気にふれる気にならなかったものであり、掃き溜めへ向ったのであります。」

独ソ戦後、あらゆる分野で締めつけが再開されたとき、パステルナークも批判された。アンナ・アフマートヴァは、文学界への見せしめとして集中的な攻撃をうけていた。党中央委員会決定として批判の対象に指定された者は、体制悪の私的利用者たちの餌食になる。悪政の犠牲者に石を投げて、権力への忠誠心を認めてもらおうとする者がいつの場合にもでてくる。批判に精だすことが処世術なのである。

お上にうとまれたパステルナークへ、苦境を脱するためにアフマートヴァを批判するようにすすめた者がいた。⁽²⁶⁾ 加害者になることによって自分を救えというこの助言を、パステルナークは、しりぞけただけでなく、アフマートヴァに援助の手をさしのべた。

パステルナークとマルトゥイーノフの生き方、国家権力とその犠牲者への態度は、対極的である。強権下ではマルトゥイーノフ型が多数派である。

パステルナークが「掃き溜め」へ向ったのではなく、この集会在、そしてパステルナーク迫害の場合全体が「掃き溜め」であり、パステルナークは、“掃き溜めの鶴”であった。集会在、パス

テルナークを国外へ追い出せという合唱の場になった。彼の同業者たちは、「祖国の裏切り者」を追放せよと叫ぶことによって、自分を愛国者として売りこんでいる。愛国心は、このさい、国への掛け値なしの愛情ではなく、国家権力への卑屈な忠誠心である。ソヴェト的愛国者たちは、反権力的愛国者を蛇蝎のように嫌う。だからこそ『ドクトル・ジヴァゴ』の作者に「非愛国者」の烙印が押されたのである。

愛国心が商なわれ、愛国業者たちがパステルナークを商なう。エマヌイル・カザケーヴィチは、無いはずのパステルナークの愛国心について考える。

母国は、気高い女を愛するように、しみりと愛さなければならない。それは、聖女を愛するように、気恥ずかしげに愛さなければならない。これは、芸術性だけの問題でなく、倫理の問題である。母国への愛は、勇敢さと善行との奇跡、卑劣さと憎悪の奇跡をなし得る偉大な情熱であり、偉大な力である。後者があまりはびこらないようにするには、この愛を静かに、しみりと抱いておくことだ。母国を声高らかに、これ見よがしに愛する者には、これにたいする報酬を私人——出版者——ではなく母国そのものがだす場合には特に、打算的であわれな人間だという評判がたつのはさけられない、たとえその人が三倍も誠実であったとしてもである。だから、愛国心をほとんど職業にしている我が国の官許の詩人たちの下品な、あからさまな感嘆や感動をあらわにしたため息よりも、祖国ソヴェトにたいする自分の気持ちをあらわすさいのパステルナークの気恥ずかしさと抑制のなかに、愛国心や共産主義的道德さえもがより多くあるのだ。もしも、この詩人たちが、自分は若者を教育しているのだ、あのようなやり方で自分の高揚した気持ちを若者に伝えられるのだ、などと思っているとしたら、大まちがいである——私は彼らの内の誠実で正直な者について言っているのだ。私企業ではなく国家そのものが詩人に讃美料をはらう国では、そのたぐいの讃美は、人びとに、とりわけ、懐疑と否定に傾きやすい青年に、その讃美が心からのものではないというこの上もなく深刻な疑いをおこさせるので、目的を達することはできない。我が国の著名な芸術家たちの大方がそうであるように、国家に認められればそれだけ大衆は認めなくなるという結果になる。(27)

愛国心を飯の種にする連中は、カザケーヴィチが言うように、「声高らかに、これ見よがしに」それを表現しなければならないから、集会では、パステルナーク国外追放の仕事をソヴェト政府が単独でやるのではなく、自分たちが一まいかんでいることを分らせるために決議案の文章が変えられた。「ソヴェト政府が」を「我々はソヴェト政府に要請し」と変えることによって、自分たちが「裏切り者」追放の発起人であるという名誉と功績とを記録したのである。

しかし、本当は誰れが「祖国と文学の裏切り者」か。

この会場にいる全員がパステルナークを犯罪者だと認めているのではない。彼を罵倒している

者のなかにも、パステルナークを本物の詩人、立派な人格者だと思っている者がいる。パステルナーク非難の声をあげた詩人ボリス・スルツキイは、休憩時間に、エヴゲーニイ・エフトゥシェンコによびとめられた。彼は、「銀貨30枚」と言って、スルツキイに30コペイカさしだした。(28)スルツキイの内的理由とは無関係に、このような政治的仕掛けの一部として動いたこと自体が、ユダの行為である。

パステルナーク追放の合唱は、前日に公表された共産青年同盟書記セミチアスヌイの演説と呼応している。彼は、豚をひきあいにして、豚ですら食事をしたり眠ったりする場では糞をしないのに、パステルナークはそれをやらかしたと「祖国への裏切り」をこのように表現し、詩人に「資本主義の天国」へ行くことを勧め、彼が去れば国内の空気がきれいになるだろうと国外追放を示唆した。

スミルノフ議長は、セミチアスヌイにおもねるかのようになり、その演説を引用し、「そこには、まあ多少とも品位に欠ける言葉や豚との比較がありましたが、本質的には実際このとおりなのであります。」と言うしまつである。

豚より下等で、恩しらずのパステルナークは、ソヴェト体制へ憎悪をいだきながら、今まで公然とは敵の陣営に移らなかった「仮面をかぶった敵」だと議長により断罪される。『ドクトル・ジヴァゴ』がその仮面を剥がしたということになる。

パステルナークの幻の仮面を剥いでみせた詩人たち作家たちの同類について、パステルナークは、3回の「モスクワ裁判」の後、1939年に語っている。

フセヴォロド・イヴァーノフ、この誠実きわまる芸術家ですら、この時期には卑劣なことをしました、訳の分からんことをね、忌まわしいものに全部署名したんです、芸術という自分の巢穴に指一本ふれさせないためです。彼は熊として鼻面に鉄の輪をつけられ、それをつかんで引きずりまわされ、啄木鳥きつつきとして彼は我々皆と同じように陰謀についてのおとぎ話をくりかえし言わされました。しかし、熊であることが気にいってしまい、鉄の輪が鼻面からはずされても、まだ、うれしくて遊歩道をうろつき、見物客のなぐさめに踊ってみせる輩がいます。」(29)

パステルナークは、熊にも啄木鳥にもならなかった。しかし、その役を演じた詩人や作家を責めない。ありもしない陰謀や祖国への裏切りを糾弾する文書に署名するか拒否するかが、生死の分かれめに、あるいは、今までどおり専門領域で働けるかどうかの分かれめになる状況下では、その忌まわしい行為を認めることも非難することもできない。

しかし、直接的な危険が遠のいても、あいかわらず同じたぐいのことを続けている連中は、別問題である。死刑台はかたづけられていないが、自分の首から縄がはずされたのなら、芸術家には、もはや、忌まわしいことをする理由がない。これが、パステルナークの発言の主旨である。

これから20年たち、「銃殺の時代」が去ってから、熊や啄木鳥の群がパステルナークに襲いかかった。彼らは、死の恐怖からやむにやまれず行っているのではなく、自分の政治的処世術から行動している。長年のソヴェト体制下で、嘘や方便や演技や擬態が彼らの習性となった。仮面が顔から離れなくなった物語の主人公に似ている。仮面が顔になり、顔が仮面になる。権力によって鉤につるされた犠牲者は、彼らにとって御馳走である。

「唯美主義者で頽廃芸術家」という表現では、「裏切り者」であることがつたわらないというヴェーラ・インベルの発言は、芸術上の誤りを政治の分野に移して、政治犯罪化させて息の根をとめるという、スターリン体制下で使われた手である。集会全体がその手を使っているのに、インベルの提案は蛇足であったが、彼女は、追われる者に追い打ちをかけて、自分の働き、自分の立場を公的に宣伝したのである。単に「頽廃芸術家」であるなら国外追放という政治犯的処分はおこなわれないが、「祖国への裏切り者」となれば政治犯である。

インベルは、自分と同じ年である68才のパステルナークを住みなれた母国から放り出す仕事に加わった。彼女は、パステルナークを売ることによって、自分の老後の安住と幸せを買うのである。

パステルナークは、この集会の2日前、10月29日にノーベル賞辞退の電報をスウェーデン科学アカデミイに打っていた。これは、パステルナーク弾圧の実行責任者である党中央委員会文化部長ポリカールポフとの話し合いの上での妥協であったが、「自発的な辞退」という形をとらされた。

ソヴェト共産党中央委員会内

ニキータ・セルゲーエヴィチ・フルシチョフ殿

尊敬するニキータ・セルゲーエヴィチ、私は、あなた個人とソヴェト共産党中央委員会およびソヴェト政府に申しあげます。

政府が「ソヴェトからの私の出国にいかなる邪魔もしないだろう」ということがセミチァースヌイ氏の演説から私には明らかになりました。

これは、私にはあり得ないことです。私は、ロシヤと誕生、生活、仕事によって結ばれています。

ロシヤ抜きにして私は自分の運命を考えることができません。私の誤りや迷いがどのようなものであれ、西側において私の名のまわりで煽りたてられだした政治的運動の中心に、私が身を置くことになるとは思ひもよらないことでした。

これを自覚して、私は、ノーベル賞の自発的辞退をスウェーデン科学アカデミイに通告いたしました。

私の祖国の外へ出ることは、私にとって死も同然です、したがって私にこのような極刑を科さないようお願いします。

誓って申し上げます、私はソヴェト文学のために幾らかの事をなしとげました、そして、まだそのお役に立つことができるであります。

ボリス・パステルナーク (30)

1958年10月31日

パステルナーク事件は、フルシチョフ政権が、「スターリン批判」による闇から光への移行期だと全世界に宣伝している時に起った。この醜聞は、政治的損得勘定からすれば、早く決着をつける必要があった。ソヴェトにとって必要で大切な政治家、インドのネルー首相まで加わったパステルナーク支援の国際的な運動がおこなわれている。パステルナークの手紙を受け取ったフルシチョフは、批判運動をやめさせた。

権力と文学界との共同演出による危険な茶番の幕が下りた。狩りが終わったのである。

権力の狩人と文学界の勢子たちが詩人を追いつめた。しかし、勢子としてがんばった熊と啄木鳥の群は、パステルナーク狩りの前であれ後であれ、芸術の銀河への飛翔を詩神によって阻まれ、通いなれた地上の門をくぐるだけである。

ひょっとしたらこれは神の思し召し

下司にはお役所の戸口へ

敷居がすりへるほど通う以外に

道がないのは。(31)

終章

1958年9月、ノーベル賞さわぎの一ヵ月半ほど前、パステルナークは、エイゼンシュテインの『イヴァン雷帝』第2部で雷帝の私的政治警察オブリーチニナが正当化され、讃美されていると聞いて、憤慨した。

「なんという卑劣さだ。彼らは皆たいしたものだ——エイゼンシュテインもアレクセイ・トルストイ (32) もその他の連中も。彼らとは付き合えるものではなかった、長いあいだ私は人と会うのをほとんど断ったのですよ。力への隷従と中途半端さのために、私は我が国の知識人にはがまんできません。彼らは半人間というところですよ。半人間だ。」 (33)

モスクワ公国の専制君主イヴァン雷帝は、スターリンお気に入りの人物で、この暴君を讃めたたえた作品をつくることは、スターリンへの間接的な阿諛^{あゆつししょう}追従になった。

エイゼンシュテインとスターリンとは、名工と異常にきびしい注文主との関係にあった。エイゼンシュテインには自分の雷帝像をつくる自由はなかった。オブリーチニナを凶徒の群として描きだせば、上映禁止ぐらいではすまなかっただろう。

パステルナークは、国家権力の注文に応じ、その時どきの政治状況にあわせ、個々の権力者に媚^{こび}て、創作活動を維持するという多数派には属さなかった。パステルナークにたいする同業者、特に文学官僚からの異常な攻撃の一つの要因がここにある。彼らは、パステルナークの生き方そのものに自分たちへの軽蔑を感じとったのである。自分たちとの距離ゆえに彼らはパステルナークを「隠遁者」「国内亡命者」と呼んだ。

ソヴェト体制、ソヴェト史、その中での知識人の運命について自由な発言を後世に残そうとしている晩年のパステルナークにとって、お役所の門へすいこまれていく文学者たちの生態はますます耐えがなくなっている。

しかし、もはや彼らにかまうことはない。人生の残り時間は少ない。パステルナークは、『盲目の美女』という劇を完成させることに全力をそそぐ。時間が惜しいので、多くの楽しみを犠牲にして、執筆する。彼は、芸術についての考えをその作品で表現するつもりである。

主人公ドミトリイ・アガフォーノフは、伯爵夫人と農奴とのあいだに生まれ、農奴として育てられた。彼は、お屋敷付属の劇団の名優である。地主である伯爵によってパリへ送られ、芝居の修業をして帰ってきた。農奴の身でありながら、高位高官の前で演じる賤民のなかの選良である。

演劇が大好きで、農奴からなる一座を編成し、それに金を惜しまない地主と、そのおかげで芸術家になった農奴たちとの関係は、パステルナークが知りぬいているソヴェトにおける国家権力と芸術家との関係を暗示しているようにも思われる。しかし、作品は未完に終わった。大きな主題を展開する時間は、もう残っていなかった。「前途には僅かの時間しかなく、一方やりとげたいことは多い」のに、1960年5月に心筋梗塞がおきた。その後、原因不明の咯血があった。何人かの医者が誤診をくりかえし、5月26日、レントゲンで肺ガンが見つかった。すでに転移している。

かつて、彫刻家マースレニコヴァが「あざやかで力強い作品は、あざやかで力強い個性のもとのみ生みだされる」、と言ったのをうけて、パステルナークは、「芸術では火の鳥だが、住らしのなかでは濡れたにわとりだというようなことはあり得ない」と応じた。(34)

死がま近にせまったとき、彼は妻に言った、「死ぬのが嬉しい、他人の俗物性をこれ以上がまんできない、この現実と和解しないで去って行くよ」。(35)

これは、火の鳥の言葉である。

5月30日、パステルナークは、妻とイヴィンスカヤとの二重生活を2人の息子に託び、午後11時20分に死んだ。

パステルナークは、作家同盟を除名されたが、その付属機関で、同盟員の経済的な面倒をみる文学基金からは追い出されていなかった。作家同盟は、詩人の死を「文学基金加入者パステルナーク」が死んだと発表した。

パステルナークの死を聞いたイリヤ・セリヴィンスキイは、クレムリン近くのカフェで、クレムリンの壁の方を向いて、元気いっぱい^{こんきち}に言った、「今日だれがロシア第一の詩人か、今度こそ

はあちらで分かってくれるだろう」。(36)

この光景は、「一生がそれとの闘いについやされた」というほどパステルナークが嫌った俗物性と、権力と、詩人とのつながりの絵解きである。それはまた、お役所の門をくぐる「下司」の図解であった。

クレムリンの壁に向かっての独言は、一詩人の奇行ではない。パステルナーク追放の合唱もクレムリンに聴かせるためであった。

眠るな、眠るな、芸術家よ
眠りこけるな
お前は永遠からの人質
時間の捕虜 (37)

芸術家の在るべき所は永遠である。彼は、永遠という場から時間へ人質にとられている。ちぎれちぎれの、その場その場の時間は、詩人にとって、仮の宿りである。

権力と俗物、あの「下司」には、永遠のおこぼれ、時間という狭い断片が全世界であり、全宇宙である。

スターリン時代も「スターリン批判」の時代も過去におし流した大きな歴史から見れば、詩人の天職を妨げようとした「にわとり」「熊」「啄木鳥」の企みの手は、永遠の高みを飛ぶ「火の鳥」にはとどかなかった。

人間は不死とは無縁である。霊魂も不滅ではない。しかし、人間は、人類の記憶の流れに入ることによって永遠とかかわりあうことができる。それは心の歴史であり、文学も思想もその中に太古から流れをつくっている。

「永遠からの人質」としての芸術家は、「時間の捕虜」の状態で獲得した天職の成果をもって、在るべき場としての永遠へ帰る。

天職への献身は、記憶の大河へ入る準備である。天分や才能は、その岸べまで歩いていく力である。

「時間の捕虜」であった時期、つまり、生身の人間としての創造者の生涯には、この流れとは無縁な大群がしばしば妨害者となって立ちふさがる。スターリン体制は、そして、一般的にソヴェト体制は、権力にとって必要な、刹那的な仕事、永遠とはいかなるつながりもない仕事を創作者たちに課した。その課題の実行部隊が「永遠からの人質」を包囲した。

『ドクトル・ジヴァゴ』という一冊の書物の運命は、この事情を明らかにする典型的な事例であった。

注

- (1) ПФЛ/Проверочно-фильтрационный лагерь/
- (2) クルイローフの寓話『隠者と熊』（1807年）に登場する。ここでは、党が指令的論文をだすと、その普及、宣伝とそれにもとづく批判、弾劾運動に積極的に参加し、その働きぶりを認めてもらおうとする加害者型の出世主義者たち。
- (3) Вопросы литературы. №2. 1990. с.95.
- (4) Там же. с.112.
- (5) Зоя Масленикова. Портрет Бориса Пастернака. “Советская Россия”. Москва. 1990. с.187.
- (6) Вопросы литературы. №2. 1990. с.99.
- (7) Там же.
- (8) Борис Пастернак. Собрание сочинений в пяти томах. т.2. “художественная литература.” Москва. 1989. с.75.
- (9) Вера Инбер. Вдохновение и мастерство. “Советский писатель”. Москва. 1957.с.7.
- (10) Там же. с.7—8.
- (11) Там же. с.12.
- (12) Там же. с.32.
- (13) 政治的現象となった『ドクトル・ジヴァゴ』への熱がさめないうちに出版し、大儲けしようと、出版業者と翻訳業者からなる火事場泥棒の群が、世界の数十カ国でやつつけ仕事の翻訳を発売した。
日本では林子林二郎訳の上巻が1959年2月1日に初版4万部で、下巻が4月1日に7万部で、時事通信社から出版された。訳者は、イギリスで発行された英語版から重訳している最中に、それが信用できない訳だと知り、イタリア語訳とアメリカの英語訳とをつきあわせて日本語に移し、上巻を出版した。ところが、第二部を翻訳中にロシア語版が手に入ったので、訳者は、第二部十一章七節からロシア語を底本にして訳した。途中から底本が変わった翻訳が、大いばりで、鳴物いりで売りに出され、多くの買手を見いだした。
『ドクトル・ジヴァゴ』は、母国では出版されないことによって、外国では出版されることによって、ともに傷ついた。パステルナークは、内では権力と文学官僚たちによって、外では浅ましい商売人によって、泥をあびせられた。
- (14) 編集者たちの手紙は、雑誌『新世界』1958年11月号に掲載された。この手紙の引用は全てここからおこなう。
- (15) Переписка Бориса Пастернака. “Художественная литература”. Москва. 1990. с.542
- (16) Александр Гладков. Встречи с Пастернаком. YMCA-Press. Paris. 1973.с.137.
- (17) Варлам Шаламов. Левый берег. “Современник”. Москва. 1989. с.545.
- (18) 作家アレクサンドル・ファジェーエフの自殺をさす。
- (19) Переписка Бориса Пастернака. с.565—566.
- (20) Ольга Ивинская. В плену времени : годы с Борисом Пастернаком. Fayard. Paris. 1978. с.250.
- (21) Портрет Бориса Пастернака. с.39.
- (22) Стенограмма общемосковского собрания писателей 31 октября 1958 года. Горизонт. №9. 1988. 集会での発言は全てここから引用する。
- (23) ギリシャ語で世界市民という意。スターリン指導下で1940年代後半におこなわれたユダヤ人弾圧のさい、ユダヤ人の代りにコスモポリトという言葉が使われた。ここでは、パステルナークを、生まれた国と真の結びつきを持たない人間として非難しているだけでなく、パステルナークがユダヤ人であることがほのめかされている。
- (24) Вопросы литературы. №2. 1990. с.164.
- (25) Литературная газета. №35/1.9.93/

- (26) Евгений Пастернак. Борис Пастернак. Материалы для биографии. “Советский писатель.” Москва. 1989. с.585.
- (27) Э. Казакевич. Слушая время. “Советский писатель”. Москва. 1990. с.82—83.
- (28) Литературная газета. №35/1.9.93/.
- (29) Вопросы литературы. №2. 1990. с.100.
- (30) Правда. №306/2.11.58/.
- (31) Борис Пастернак. Собрание сочинений в пяти томах. т.2. с.582.
- (32) アレクセイ・トルストイは、伯爵夫人の子として生まれたが、伯爵家とは無関係に育った。しかし、伯爵は、遺言でアレクセイにトルストイの姓を名のり、伯爵の称号をもつことを許した。彼は、爵位と亡命者という致命的な傷をもちながら、スターリン体制への「隷従」によって、民衆とかけはなれた特権的生活をおくることができた。紛^{まが}いものの貴族は、本ものの赤い貴族としてスターリン時代を生きた。
 彼もまたイヴァン雷帝を作品化している。雷帝についての三部作の劇を計画し、第一部『番の鷲』と第二部『苦しい時期』を書いた。そこでは、雷帝と彼に劣らない高貴な血統を誇る大貴族たちとの争い、彼らと雷帝の懐刀オブリーチニナとの関係が、スターリンと古参ボリシェヴィキーとの争いと、彼らを始末した政治警察との関係を思いださせる。意図的に重ねられていると思われる。雷帝は、大貴族たちの陰謀、奸計にとりまかれ、作者は、彼らの悪辣さを強調するために、史実をまげて雷帝の病死を彼らによる殺害に変えている。彼らが外国勢力とむすんで雷帝とロシアを裏切る行為は、「モスクワ裁判」の脚本に似ている。
 アレクセイ・トルストイはスターリン体制下における創作の自由について語ることができ、それを宣伝する役を引き受けることもできた。
- (33) Портрет Бориса Пастернака. с.51.
- (34) Там же. с.203.
 「濡れたにわとり」は、哀れな様子をした人間、無気力な人間を意味するロシア語の表現。
- (35) Там же. с.246.
- (36) Литературная газета. №35/1. 9. 93/
- (37) Борис Пастернак. Собрание сочинений в пяти томах. т.2. с.97.

(1994. 9. 8 受理)